

●(株)都田建設の挑戦

吸わない職人さんに任せたい
「これからの世界水準を目指して」

加藤一晴 こどもをタバコから守る会・代表

工事現場は全面禁煙？

数ある建設業社の中で、世間からの注目を最も集めているのは(株)都田建設かも知れない。決して好景気とは言えない時代に、確実に業績を伸ばしている秘訣は、明快な理念の実践と常に相手を慮るスタンスを、50名の社員が理解し、住宅建築を通じて社会貢献をしているからだ。それは、この会社のCSR(企業の社会的責任)にも如実に表れている。

そのコンセプトは、「一本の映画のような家づくり」でも理解される。家は一生住み続けるので、契約者と施工者の意見の不一致があってはな

らないが、喫煙問題はいささか敷居が高く、従来は火災予防を目的に建築現場を禁煙措置するのが精一杯だった。

そういう社会状況下にあって、smoking(1次喫煙)、second-hand smoke(2次喫煙)、third-hand smoke(3次喫煙)の有害性啓発が進み、掛け替えのない住宅から、これらを無くすには建物・社員・建築現場関係者に正しい知識を伝える必要がある。

建築現場には大工、左官だけでなくタイル、瓦、畳、水道、電気など40業種以上から大勢が入り入りする。現場でタバコを吸えない職人は、現場近くに停車した車両の中で吸っているのが現実だった。

都田建設の蓬台浩明社長にすれば、「腕の良い職人の健康を維持し、未永く働いて欲しい」という主旨の「受動喫煙防止啓発講演の開催」は何としても達成したいことだった。

会場への関係者招待

都田建設は、毎年安全協力会総会を開催している。今年は4月17日(木)で、参加者のために「受動喫煙防止講演時間」を用意し、筆者にスピーチの場を与えてくれた。会場の浜北プラザホテル(浜松市)は20年前に禁煙ルームを導入している。そこに当地老舗の浜松グランドホテル総支配人、敷地内禁煙化を目指す(株)FDK厚生部長も招待した。

このように他職種の参加があることで、主催者や聴講者の緊張感が高まった。加えて浜北区内で禁煙外来を標榜している浜名クリニック院長の坂尾先生、禁煙治療補助製剤を販売しているノバルティスOTCを招いた。こういうサポート体制が無いままに、対象者の禁煙達成などは困難だ。相手は刷り込み教育で解決できる子供ではなく、納得しないと行動変容しない大人なのだ。

会場にはおよそ100名の大人たちが、微動だにしないでスクリーンに映し出される動画映像を観ていた。瞬きもしないで食い入るように眺めている映像は、わが国とはまったく異質の光景だった。白髪混じりの中年が、真剣に聴講していたのだ。喫煙習慣化を、恣意的・作為的に操られている現状を伝えれば、認識は激変する。「事実を伏せられて伝えられる現状のわが国」と、「タバコは過去のものにすべき海外の認識」の差に驚きを禁じえない姿があった。聴講者は、恐らく内心で「タバコを止めようかな……」と思っていたことだろう。

条で、受動喫煙の防止が努力義務化されたのが2003年。それによって、社会環境禁煙化は多くの分野で進んだが、旅館・飲食店の喫煙対策は、まだまだ不十分である。たばこ規制枠組み条約(FCTC)には、すでに180カ国弱が批准しているが、わが国は種々の既得権益が絡み合って、従来の「吸わせてもてなす」因習から脱却できていない。

また、第8章に「たばこ煙の暴露からの保護」を掲げている。これは1次喫煙・2次喫煙・3次喫煙から避難しないということだ。それらが実現できないのも、大勢が十分な判断材料を与えられずに、自分で判断せよといわれているからだ。

いわば、国民が異常な環境に置かれていることを示しているのだが、それはタバコ問題だけではあるまい。特に、3次喫煙は深刻な問題で、発がんリスクだけではなく、一戸建て建築では、絨毯に日常的に触れる乳幼児や小児は、もっとも被害を受けやすい。専門家によれば、除去する最善の方法は、絨毯の交換や換気



都田建設が主催した「安全協力会総会」で受動喫煙防止講演を行なった筆者。

あなたのDNA
を傷つけてもいい
ですか？

健康増進法 25

装置の変更まで言及している。

つまり、「吸ってもいいですか？」は「あなたのDNAを傷つけてもいいですか？」と同義語なのだ。これこそFCTC第8章の真髄であろう。我々国民は、呪縛から開放されるべきである。

これまで建築業界は、アスベストやシックハウスという難題を乗り越えて来たが、タバコによるPM2.5暴露や3次喫煙問題も同じくらいに深刻だ。

高い職人の喫煙率

巷で言われるように、成人男性喫煙率は高い。特に30～50歳代は40%ある。恐らく、職人喫煙率は遥かに凌駕するだろう。しかし、誰一人として生まれた時はタバコを吸っていない。

現在、彼らの周りには「タバコは止めて！」と切望している家族ばかりだが、マスコミをはじめ、「職人は喫煙率が高いものだ」とか、「彼らは止められないのだ」など否定的

都田建設の仕事と活動 1% For 感謝 2007年にスタート 感謝をカタチに！

素敵な出会い、一生涯の繋がりが、そして大好きな住まいづくりで夢を分かち合える仕事。それは、たくさんの方々への支えのおかげ。その感謝の気持ちを行動にしています。毎年の利益の1%を私たちの手の届かないところで活動している方々に寄付をさせていただいています。

私たちは、この活動を「1% For 感謝」と名付け、スタッフ全員で支援先を決めて心を込めてお届けさせていただいています。

都田建設スタッフ一人一人は、お客様はもちろん、パートナー様、地域社会・住民、地球環境の支えの上

情報があふれている。このようなミスリードが、根拠の希薄な喫煙擁護論調に繋がる。喫煙家庭では、未成

このように退廃的スパイラルを長年続けて来たのが、これまでの日本社会である。こうした状況に対する無関心さが「禁煙にくい職種」を熟成してきたのだ。それが大人たちの「〴〵の職種の禁煙は無理だろう」の不可解な思い込みに繋がっている。

タバコと職人の歴史

例えば、大勢は「職人はタバコを吸うもの」と誤認しているが、タバコと職人のどちらが古くから存在していたかを考えるべきである。確かに古代文明の壁画には、タバコが描かれているが、当時は祭事に欠かせないおまじないの要素として、むしろ神聖なものとされていた。まして大変高価な代物で、一般人には手の届かない贅沢品だった。現代の紙巻タバコのように、パカパカ吸ってはいなかったのだ。

わが国には1600年ごろに伝わったので、喫煙習慣はたかだか400年余の歴史しかない。恐らく、



環境大臣表彰を受賞した都田建設社長、蓬台浩明氏著作『もし、大統領が日本で家を建てるとしたら!?』（東京書籍）

で存在していることを忘れてはいけません。

◆主な仕事と活動◆

セミナー・イベント

見学会

家づくりへの想い

風と一つになった会社

おもてなしの心

1% For 感謝

オスメプラン例

ご入居後のライフスタイル

失敗しない家づくり 他

年の喫煙開始を容認し、このような例外的解釈を生み出し、結果、止められない喫煙者を作り出している。

それ以前から寺社仏閣を建立する大工、左官、瓦、畳、などの職人はいて、喫煙行為なしに歴史的な仕事をこなしていた。

例えば、わが国の古代を代表する文筆家の紫式部や清少納言は、タバコの無い時代に世界に通じる作品を生み出していたのは、まぎれもない事実である。ところが、明治時代になって、戦費調達のために専売制を敷いてから、廉価なタバコが街中にあふれ出ると、タバコを口に啜えた喫煙作家は押しなべて早死にである。

それは、優れた筆力をもった作家たちが、喫煙習慣によって合法的に短命にさせられた姿でもある。優秀な技術を持った職人の多くも、同じ憂き目に遭っている。このような負の社会構造から脱却することを、何時か誰かがやらなくてはならないが、今回、都田建設の蓬台社長が名乗りを上げた。

あるべき職人の姿

わが国には、歴史に裏付けられた

巧みの技がある。鍛錬と精進を続ける多くの職人がいる。彼らは例外なく高い技術と志を持ったアーティストなのだ。丹精こめ、深い配慮で仕事を続けるには、望ましくない習慣を絶たなければならない。蓬台社長は、著書の中で「おもてなしの力」について言及し、喫煙も「心」の問題としている。このような毅然とした指針の経営者が少しでも増えれば、事態は好転するだろう。

これまでの「職人は吸うものだ」の認識を「吸わない職人は素晴らしい成果を残す」ことに進化できるかも知れない。本来のあるべき職人の姿を目指して、新たな一歩を踏み出すことを期待している。

幸いなことに、禁煙治療も進化して、貼付剤や内服薬もあり、喫煙は止めやすい環境になっている。6年後には東京オリンピックを控えているので、喫煙率低減のキッカケになるだろう。都田建設の挑戦が建築現場関係者の間において、是非とも突破口になることを切望したい。